

〈随想〉啄木像の彫琢：生誕百年に研究・顕彰を考える

遊座，昭吾

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

119

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

1987-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019521>

随想

啄木像の彫琢

生誕百年に研究・顕彰を考える

啄木像は常に彫琢されねばならない。私的な営みに於ても、公的な営みに於ても、たえず真実を冒さぬ限りで、啄木像は真摯にかつ大胆に刻み磨かれていかねばならない。石川啄木生誕百年の記念すべき年を、昭和六十一年に迎えるにあたり、その記念行事を企画実施するにあたり、また、いまその一切の行事を終えた時点に於ても、私はこのことを考え続けてきた。そう考えねばならぬ契機は幾つかあったが、そのことを中心にしなが、文学の研究、顕彰について述べてみたいと思う。

もっとも強い契機となったのは、二十代の学生作家外岡秀俊（当時、東京大学法学部四年生、現在朝日新聞社 学芸部記者）の小説「北帰行」（昭和五十一年度文芸賞受賞）の出現であった。すぐれた新人作家の出現は、どこか歴史的事件に似た様相を帯びるが、「北帰行」の当時のブームはまさにそれに近く、私は強い衝撃を受けた。それは若い外岡の文学的思考力、想像力の鋭さに驚いたばかりでなく、すぐれた啄木理解に驚いたからである。

その外岡の作品を、いちはやく本格的にとりあげ、「外岡秀俊『北帰行』（文芸十二月号）新世代の成立を予感 啄木との対決で自己を追求」（『東京大学新聞』昭和五十一年十二月六日号）と評価されたのは、文芸評論家小田切秀雄氏であった。私はその小田切氏の書評に刺激され、助けられて「北帰行」を分析したことを思い起こす。そして、いま改めて読み直しているのである。

外岡は三つの調子を異にする文体を駆使し、小説「北帰行」の世界を構築しているように思う。主人公の生い立ちを描く文体、主人公が内面を吐き出す時の文体、そしてこの小説を全く独自のものにさせている、主人公が啄木の生きざま、文学に対して反応し、批評する、小田切氏のことばを借りると「対決」する時の文体である。第一、第二の文体に対し、第三の文体には、ともすれば読む側が眩惑され、遂には辟易してしまうほどの強い思惟性がある。しかし、

遊座 昭 吾

これは主人公も含む作者外岡の、青春の純一無雑さ故の思惟性から必然的に表出されたものであり、これなくしてはおそらくこの作品は存在しなかったであろう性質のものである。単なる若者の饒舌とだけではすまされないものをもっている。

北海道の炭鉱町U市の中学を卒業し、集団就職で上京した主人公二宮が、職を転々とかえて五年目に帰郷を決意した時、啄木の漂泊の跡をたどろうと考え、冬の盛岡、渋民、函館、小樽、釧路へと尋ね歩く。中学時代に買い求め、上京以来の彼の心を、その折々に支えてくれた歌集『一握の砂』を中心に刻んだ啄木像を、啄木の文学、思想形成に影響を与えた各地の風土に直接触れることで確かめようとする企てであった。啄木によって歌や歴史を、そして政治・社会を学びとり、たえず啄木とその時代を、自分とその時代とにダブらせて、自己の生きる糸口を模索してきた主人公であった。したがって北帰行とは、自分の彫琢した啄木像を、啄木に決定的な変貌を与えた北海道に漂泊し、自分を立たせることで検証し、それから離脱し、新たな自己の道へ踏み出す賭けであったわけである。そして、遂にさいはての釧路の丘に立ち、啄木の歌一首一首に託してきた暗い自分の青春の頁を閉じ、啄木の叙情と訣別していく自分をとらえることができる。その瞬間、「明日の考察……」とつぶやき、用意してあったベンジンで歌集『一握の砂』を焼き棄てる――。

一人の青年の歴史にこのように啄木の生涯が絡み合っているということは、その青年の全身で彫琢され、刻み磨かれていた啄木像が息づいていたということを意味する。啄木像の彫琢それ自体は、主人公を含む作者外岡の生であらわれであったわけである。その意味

でも、啄木に反応し、批判して触れる第三の文体は、この作品では欠かせぬものであったわけである。

啄木の文学が、一人の文学者の主体にこれほどアクティブに摂取、醇化され、あいかわっていたことは、中野重治以来ではないだろうか。私はそれを事件とみる。それはこの小説の結末を、友人卓也の爆弾使用を中止させようと、

俺は観る人だと卓也は言う。歌を棄てない限り明日を考察できないと彼は言う。だがどうすれば歌と訣別できるのだろうか。彼のように自分を死に向かつて投げ棄てるしかないのだろうか。だがそれは無意味なことだ。お坊ちゃんの、退屈紛れの戯言に過ぎないのではないか。俺は御免だ、犬死になんか……

その瞬間、陽気に弛んでいた雪はドドドッと大きな音をたてて屋根を迂り落ち、部屋を数秒間の暗闇に閉ざした。

行こう――再び室内に光が溢れたとき、既に私は決意していた。東京へ行こう。行って卓也の計画をやめさせるんだ。俺のすべてを奴にぶつけて、そこから何かを見つけ出すんだ。俺は観ることをやめる、歌を棄てる。あの馬鹿をこの手で殴り倒してやる。そして見えない明日と一緒に手探りするんだ……

と、決意させる構想からもうなづかれよう。因みに中野重治の「歌のわかれ」の最後を引き、その鍵となっていることばの共通さに注目してもらおう。

心をこめてつくった作品が、心をこめたことをも入れて認められた時のほてるやうな恥かしさのまじった嬉しさ、さういふものは結局して安吉は感じられなかった。げつそりした気持ちで彼は

本郷通りを歩いてかへつた。彼は袖を振るやうにしてうつむいて急ぎながら、何となくこれで短歌とお別れだといふ氣がして來てならなかった。短歌とお別れといふことは、この際彼には短歌的なものとの別れといふことでもあつた。(略)とにかく彼には、短歌の世界といふものが、もうはやある距離をおいたものに感じられ出してゐた。頼子につながつてゐた長い間の氣持ちもどこかへ溶けてなくなつて行くやうであつた。

彼は手で頬を撫でた。長い間彼をなやまして來たニキビがいつの間にか消えてしまつて、今ではそこが一面の孔だらけになつてゐた。いつから孔だらけになつたか彼は知らなかつた。しかし今となつてはその孔だらけの顔の皮膚をさらして行く外はなかつた。彼は凶暴なものに立ちむかつて生きたいと思ひはじめてゐた。多くの啄木研究家が、こうした主体とのかかわりをもたずに、いたずらに細部の事実焦點をあてていることに當惑をしていた私は、だから繰り返すが、外岡の「北帰行」の出現を歴史的事件と見、刺激されたのである。

しかし、私は外岡の啄木文学の理解を、第三の文体のみで評価しようとは思わない——ということを述べたいのである。その部分には中野重治がかつて示したすぐれた啄木批判を含む、戦後の啄木研究のダイジェストであり、啄木の歌枕を訪問する紀行文でしかないと思う時すらあるからだ。むしろ第一、第二の文体で描写された主人公の生い立ちを、現在で回想する際の、事件の状況設定やとらえ方にこそ、すぐれて鋭い啄木理解があると思うからである。これは私の過ぎた理解で、かならずしも外岡はそこまで意識していないかもしれ

れないが、しかしそう私に評価せしめるのに十分な描写なのである。少年二宮と卓也が愛した馬櫓の男源さんと仔馬ジルゴが、遠く追いやられることになったのは、この町に初めて運送会社が建物と駐車場を造成し、隣町との定期的な運送を引き受けることになったからであつた。それまで補助的とはいえ、その運送の仕事を請負つていた源さんたちの仕事が奪われ、つまり「彼らが追い払われたのは、隣町とU市を結ぶ道路が拡張され、舗装され」、市議会が馬櫓運送のできぬ条例に改正したからであつた。そのため無補償で源さんたちは町を追われ、ジルゴも消されていくのである。

源さんとジルゴを変えたのは、黒々とした道を完全に舗装し、馬櫓道を禁ずるという条例の改正である。いうなら近代化の中の、まさに日常茶飯の一琐事に過ぎない現象だ。しかし、この部分に絡ませて設定する、崖崩れを防ぐために地肌へコンクリートを吹きつける作業の描写や、また、道路舗装にかかわる部分の描写が、私からすれば啄木が姿をかえて書きまくっていると思えるほど、実に啄木的なのである。黒い岩肌にコンクリートを吹きつける時、主人公は「敵」に向かつて銃を乱射する恐怖・緊張を伴う幻覚に陥いるという。そして、巨大な都市のどんな路地も、すっかりアスファルトに舗装され、土の道を見つけることができぬことに愕然するという――。

舗装を技術的・功利的ではなく、一つの精神、一つの体質として位置づけなければならぬだろう。もし、ふとしたはずみでアスファルトを伸ばしたと言うなら、その無意識に潜む病はおそろしく重い。(略)

都市の小径が限無く舗装され、国道沿いの断崖がすべて赤茶色のコンクリートに覆われ、しかもそのことに気付かず、或いは熱情と知恵を傾けて現代の異端審問に参加していたのが、他ならぬ私たちだったということは。(略) 自然や人間味に対して敵意や生理的な嫌悪を抱く人間のひとりになろうとしていたのだった。

主人公はこんな観念に襲われながら、やがて啄木の故郷茨民へと足を踏み入れていく。そして、北海道時代の回想と場面をかえ、前述した源さんとジルゴが道路条例改正で追い出され、遂には自己の故郷を喪失するという部分に続くのである。近代化の中ではまさに日常的なこの現象を、功利性のみで処理していく側を斬って、一つの精神的なものとみると、アスファルト舗装の道路の延長は、新しい得体の知れないものが、かつ一人歩きするものが、古いものの上に密着して、その生命、息の根を奪い取っていく過程であるのかもしれない。同時にそれは、馬橋男の源さんと仔馬ジルゴにとつての、故郷喪失を意味する——とするこの外岡の近代化、現代化の把握は、実によく啄木の明治後半期の文明把握に通じているのである。

十四行のソネット、四、四、四・六の十八音の偶数音で整調された詩「啄木鳥」を書いたのが、明治三十六年十一月、十七歳の時であった。その詩の中で、天然にして不滅の「愛」、俗界から隔離された「緑」、そして永却尽きない瞬間の「時」が造る世界を、理想郷としたこの年少の詩人は、その「愛」の火をもって作りなしたる巨鐘の無際限なる響きに染められた霊も住む「緑」の聖きを、俗界の塵の疾風が侵そうとしている——、と終日夏樹の髓を刻んで、生命を賭けてなすあの啄木鳥の警告を人は聞かねばならぬ——とうたっ

たのである。

この詩想が彼の体内に宿った時、警告の詩人「啄木」が誕生する。そして、わずか二十六歳の生涯の中で、幾度か彼は頭上から、樹上から人間に警告の叫びを繰り返すのである。人間性を失ってミイラと化した教育の荒廃に、評論「林中書」(明治三十九年、済民にて)をもって警告し、「強権」「国家」「敵」「理想喪失」「今日」「明日」をキーワードとして、明治末期の日本に評論「時代閉塞の現状」(明治四十三年、東京にて)をもって警告する。

この二つの間に人と猿とを登場させ、架空の大論争をさせ、時代の文明のもつ空しさを衝き、強烈な告発、警告をなしたのが、明治四十年、北海道で執筆した評論「一握の砂」であった。その主題は、森林を倒し、山を削り、河を埋めて、自然を破壊して作る道路を、真美の世界に通ずる道とせず、地獄の門に通ずる滅亡の道としたものであった。当時、文明の功利性に積極的に酔い痴れていた人間へ、まさに樹上の猿に変身して、啄木は警告したのである。その猿のこぼれを引いてみよう。

噫々、汝は遂に人間最悪の思想を吐き出せり。汝等は随所に憎むべき反逆を企て、自然を殺さむとす。自然に反逆するは取りも直さず之れ真と美とに対して奸悪なる殺戮をなす也。汝等は常に森林を倒し、山を削り、河を埋めて、汝等の平坦なる道路を作らむとす。然れども其の道は真と美の境——乃ち汝等の所謂天に達するの道にあらずして、地獄の門に至るの道なるを知らざるか。汝等既に祖先を忘れ、自然に背けり。噫々、人間ほど此世に呪はるべきものはあらず。

外岡の彫琢した啄木像は、いま数多い若い人びとに静かながら重々しく、自己の啄木像の彫琢を促し、啄木の蘇生を促している。ともすれば己の若き日のメモリアルとして、あるいは相応の年輩者が、かつて啄木の抒情に酔い痴れた日の回想としてのみ享受される啄木文学が、こうして若き学生作家に、しかも本質的に摂取、醇化されていることに、私は新しい啄木研究史の一頁を見、今後の啄木文学研究の可能性を見たいのである。このことは逆に言えば、何かを忘れたところでなされている啄木研究の現状を指摘することにもなる。

人口一万四千余の小さな村、玉山村(旧渋民村、玉山村、巻掘村が戦後合併してできた村)が、昭和六十一年に迎える石川啄木生誕百年の記念事業と行事を計画し、それを全国の人びとに公にしたのは、五十九年四月十三日の啄木七十三回忌に於てであった。それは新石川啄木記念館(総工費一億四千万円)の建設、「シンポジウム 石川啄木——啄木文学の研究・顕彰の現状と課題——」、生誕百年祭、全国規模の記念短歌会、同俳句会の開催、それに『ふるさとの四季——啄木文学の原風景』の記念出版等の内容を含むものであった。わずか二年の準備期間しかなかったが、村ではこれを地域の文化運動、村づくりの運動の核としてまずとらえ、行政にたずさわる者、研究者、一般村民が一九となつて取り組んだ。私は研究者の一人として、すべての企画運営に関係したが、常に新しい啄木像を新記念館の展示に、シンポジウムに、啄木祭、記念出版に刻み生かされねばならぬという意識をもち、それを各種準備委員会で述べ

け理解を求めた。

そして、昭和六十一年二月二十日、啄木生誕百年の日を迎え、春の遅い岩手にも百花が咲きそろう、もっとも美しい季節の五月を迎えたのである。五月二日、生誕百年行事の開幕を飾る「シンポジウム 石川啄木——啄木文学の研究・顕彰の現状と課題」が、盛岡市の中央にある盛岡会館で催された。発表者は関西啄木懇話会代表天野仁氏、会津啄木会事務局長三留昭男氏、仙台啄木会会長南條範男氏、盛岡啄木会会長中島嵩氏、函館在住の日本近代文学会員櫻井健治氏の五人、それに指定討論者として、福岡教育大学教授昆豊氏、日本大学短期大学部教授藤沢全氏、茨城キリスト教短期大学教授堀江信男氏、岩手大学教授大沢博氏、釧路短期大学教授鳥居省三氏、日本近代文学会員清水卯之助氏、大阪啄木会機関誌編集者妹尾源市氏、日本近代文学会員の上田哲氏、浦田啓三氏の九人。総合司会は私が担当した。北は北海道釧路から、南は福岡まで、まさに全国の啄木学者、研究者を一堂に集め、午後二時から六時までの四時間ぶつ通しのシンポジウムとなった。

各地域の啄木会が実施している顕彰の現状と課題が報告され、啄木文学顕彰の実態が明らかにされていく。それに学者、研究者である指定討論者が、研究の成果を踏まえて討論に加わり、課題を焦点化していった。司会を担当した私は、多くの収穫をこのシンポジウムから得たが、しかし率直なる感想は、各地域の啄木会の顕彰の根底に、研究の成果が生かされていないこと、それ以上に研究の姿勢が欠けているということであった。また、研究者、学者の意識の中に、よい意味の顕彰が位置づけられていないようにも思われた。今

後ますます地域文化の活動や博物館活動が盛んになっていくと思われるが、研究と広い意味の顕彰が絶対に調和していなければならな
いと、このシンポジウムを通して強く知らされたのである。ともあ
れ空前といってよいこの啄木のシンポジウムの実施は、百三十余名
の一般市民の参加も得て、確実に成功したと思っっている。

翌日の五月三日、新石川啄木記念館はオープンし、啄木のふるさと
と渋民で盛んな生誕百年祭が催された。五月三日は、かつて啄木が
明治四十年五月、故郷渋民で最後を過ごした日である。翌日は渋民
を去って、北海道への旅に立ち、以後二度とふるさとに帰ることは
なかった。また、五月三日は弱冠十九歳の時、処女詩集『あこが
れ』（明治三十八年）を発刊して、詩人啄木の名を詩壇に登録した
日でもある。その因縁のある日を選んでの百年祭の式典では、工藤
巖文部政務次官をはじめとする各界代表の祝辞をいただき、続いて
玉山村村長高橋求馬氏が、啄木ゆかりの地東京都台東区、文京区、
函館市の各代表と、ステージで固い握手をかわし、啄木を基点に今
後友好の絆を深めようと誓い合った。実に感激の深い場面であっ
た。

そして、さらには啄木の後輩にあたる盛岡第一高校、夫人節子の
後輩にあたる白百合学園高校両音楽部員による、その日のためにつ
くられた高橋昭八郎作詞、加藤学作曲の「風の波流^{はる}」の大合唱は、
実に新鮮で感動的であった。青春のただ中にある後輩の高校生たち
が、ありったけの心をこめて先輩啄木、節子の生誕百年を祝福・讃
歌した。――節子もまた啄木と同じ明治十九年生まれである――そ
の若い高校生のうたう合唱は、澄んで明るく、青春のままに生き続

た詩人啄木、夫人節子の若き日の魂を人びとの前に再現してみせて
くれたような感じであった。確実にこの高校生たちの心にも、啄木
像は彫琢されていったと思っただ。

この日、啄木のふるさと渋民を訪れた何千人という多くの人びと
の中に、啄木の令孫石川玲児さんご一家、夫人節子の弟堀合了輔さ
んの長男ご夫妻、啄木を敬愛し続けた宮崎郁雨のご子息、それに啄
木の臨終を看取った唯一の文学の友若山牧水のご子息という、ゆか
りの方々もおられた。また、毎年四月十三日に、啄木鎮魂の儀式を
挙げておられる東京文京区の「啄木終焉の地」の宇津木氏ご夫妻
も、式典その他に臨まれていた。

新石川啄木記念館は、多くの愛好者の浄財で完成し、また記念出
版の『ふるさとの四季――啄木文学の原風景』も五月三日に世に出
た。すべては全国の啄木愛好者の心で、百年祭は終了したというて
よい。また、多くの芸術家専門家の協力・奉仕にも支えられた。特
に、戦後の啄木研究を小田切秀雄氏とともに推進してきた日本大学
の文学博士岩城之徳氏の資料提供、彫刻家舟越保武氏のブロンズ啄
木像の寄贈は、新記念館に生命を与えて下さったと思っっている。私
は啄木が青年期を送った渋民の万年山宝徳寺に生まれ育ち、その因
縁で今日まで啄木にかかわる仕事に関係することができた。とくに
も啄木文学の研究と顕彰とを合わせ続けてこれたのは、啄木との因
縁のなせるわざではあるが、長い間にわたって、私に与えて下さっ
た文芸評論家小田切秀雄氏、文学博士岩城之徳氏のご指導があった
からである。両氏の学恩によって、私は私なりの道を開いてこれた
と思っっている。（昭和二十六年卒業 盛岡・生活学園短大講師）